

— 東 日 本 大 震 災 — 私 の 記 録

佐藤敏彦[†] (さとう動物病院院長)

平成23年3月11日金曜日午後2時46分、この時私は家にいた。地鳴りがしたかと思うと大きな揺れが起こった。その揺れはさらに大きくなり、しばらくしてから止まった。机の上の雑誌や資料、本棚の本がほとんど落下し足の踏み場もなかった。岩手県一関市は震度6弱、県境で隣町の宮城県栗原市は震度7であった。揺れが治まってからすぐに病院に行ったが、通路の扉の向こうは血液塗抹や細胞診のスライドガラスが散乱し、その向こうは棚から落ちたシリンジや針、パンフレットや臓器模型、カルテなどが散乱していた。幸い検査機械類やパソコンなどで落下したものはなく大きな損害は免れたが、壁には亀裂が入っていた。

このような状況だから来院する人はいないだろうと病院を閉め、従業員を早目に帰宅させ家の片づけを行った。電気・ガス・水道が止まっているので夜を過ごせる場所を確保する必要があった。小学校に子どもたちを迎えに行った妻が戻ってきた。子どもたちは年度末であったがランドセルや学校に置いてある教材はそのまま、何も持たずに戻ってきた。小学校の校舎は屋上の貯水タンクが破損し、最上階の教室が水漏れ被害を受けたほか、校舎自体の損傷も激しく、結局新学期になるまで春休みは1カ月以上続いた。

東北の3月はまだ冬である。特に朝晩は暖房器具なしでは生活できない。最近は多くの家庭が石油ファンヒーターを使用していると思われるが、これは電気がないと動かない。幸い家には石油ストーブがいくつかあり、これで暖を取り、お湯を沸かすことができた。水は歩いて15分くらいのところにある公民館で給水車から分けてもらった。2度ほど往復しただろうか？ テレビでは見たことが、まさか自分の身に起こるとは…。それでも私が住んでいる地域は市内でも復旧が早いほうで3月14日にはライフラインが、15日夜には通信が復旧した。PCを立ち上げメールを見ると、多くの方々から安否確認やお見舞いのメールが届いていた。ありがたいものである。

さて、病院である。地震翌日は誰も来ないだろうと思ったが何人かが来院した。幸い大きな病気はなかったが、困ったのは椎間板ヘルニア疑いのミニチュアダック

スフントであった。X線検査ができない。症状と神経学的検査から腰部椎間板ヘルニアと診断し投薬及び安静指示で様子を見ることにした。しかし、回復が遅いため、後日脊髄造影及びヘミラミを実施した。少し時間はかかったが歩行可能になり飼い主ともども一安心した。一関市内の動物病院には三陸沿岸部の市町村からも犬猫の来院がある。当院でも何人かの飼い主の方や犬猫が津波の犠牲になっている。

妻の実家は三陸沿岸部にある気仙沼市である。気仙沼湾沿いのほとんどの市街地が津波により被災し、さらに湾の反対側では大規模な火災が発生していた。妻の実家はその近くにあって、海沿いの道路の陸側に駐車場と義父の作業場があり、坂を上った小高い所に家があった。ほかに坂の道の向かい側に1軒、さらに上のほうに1軒。この3軒だけが津波の被害から免れていた。火災は向かいの家の玄関と実家の庭の松の木が燃えたところで鎮火した。これは後から聞いた話で、震災後はしばらくの間連絡が取れなかった。連絡が取れて車で妻の実家に見舞いに行ったのは9日後の日曜日であった。車が市街地に近づくにつれて悲惨な状況がみえてきた。そこにまともな建物はほとんどなかった。テレビで見る東京大空襲後の街並みと表現すれば想像しやすいだろうか？物が焼けたにおい、油のにおい、泥のにおい。マスクを着けていても強く匂った。妻はどのような思いで車を運転していたのだろうか。普段使用するいくつかの道路が瓦礫のため通行できず、川沿いの細い道を通った。妻の実家の駐車場はすぐにはわからなかった。建物は津波で流さ

佐藤敏彦

— 略 歴 —

1989年 北里大学大学院修士課程
修了
1991年 さとう動物病院開業
現在に至る

岩手県獣医師会小動物臨床部会長・
理事



[†] 連絡責任者：佐藤敏彦 (さとう動物病院)

れ、残っていたのは火災後の残骸である。目印となる建物がなくなっていて、通り過ぎてしまった…。家では震災後数日間 20 人位の人が避難していたそうで、米軍からの支援物資が届いていた。近所の多くの方が亡くなったり、行方不明になったそうだ。

原稿に向かっていると、いろいろなことが思い出された。義父から聞いた遺体確認の話、津波被害にあった沿岸部の知り合いの病院の後片付け、震災から約 1 カ月後の 4 月 7 日深夜に発生し、本震並みの被害をもたらした最大の余震。本当にいろいろなことがあり、同時にさまざまな思いがあった。今回震災を経験した人は、その人なりにさまざまな思いや感情にとらわれたことだろう。私の心の中でも何かが大きく変わった。もどかしいが、

それは感覚的なもので言葉で表すことはできなかった。そして 4 年 3 カ月が経った今、日々の生活や仕事の忙しさにより、その感覚は震災の記憶とともに薄れてしまっていた。

今回、執筆に当たり震災の経験を思い起こすことができた。薄れていた記憶は当時の記録写真を見ることで思い出せたが、あの時感じた感覚は甦らない。しかし、それでもよいと思う。それよりも、あのような災害がもう二度と起こらないことを願うばかりである。

最後に、このような機会を与えてくださった日本獣医師会雑誌編集委員会と執筆をお薦めいただいた戸ヶ崎動物病院 諸角院長に深謝申し上げたい。